



山崎爲徳（明治12年京都において写す22歳）

山崎為徳の終焉と新島襄

高橋 光夫

岩手県水沢で生まれ、同志社英学校の幹事兼教員であった山崎爲徳が、結核のため療養先きの新島邸で昇天したのは、明治十四年十一月九日の午前六時二十分頃である。二十四年と八カ月の生涯であった。『新島襄先生詳年譜』（森中章光編）には「同志社教師山崎爲徳新島邸において永眠、将来を最も囑望した門下生のため痛惜する」と記述されている。

山崎は発病の当初、府立京都病院に入院加療していたが、病状の悪化によりもはや恢復のみこみないことを知った新島は、山崎を病院の一室で死なせるのは到底忍びえないとして、自邸に引き取ったのであった。この当



山崎爲徳の父、山崎爲美（明治12年5月、弘前区裁判所判事補、44歳）

時、新島が徳富猪一郎（蘇峯）に宛てた書信中に

先達中ヨリ山崎兄肺病ニ罹リ京都病院ニテ加療セシニ、余程危篤之様体ニテ院医モ回復ヲ期シ難キヨシ被申候ニ付、一周前ヨリ拙宅へ引取り療養致候

とその経緯を知らせている。

肺病が「不治の病」と言われた時代には、病む人には死の恐怖を、看病する者には伝染の恐れを与えていた。そうした時、恢復のみこみのない、しかも感染の恐れのある「肺病患者」を自宅に引き取るという行為は、常人のなし難い愛の決断として感嘆のほかはない。

この頃、新島は同志社英学校草創直後で繁忙のさなか

にあり、しかも自身が五月以来の病気のため苦しんでいたから「格別気分モ不振候処、又々山崎兄ノ為に種々心配セシ故カ何分頭痛致シ困却」（前出書信）し、山崎を自宅に引き取った直後の八月二十七日に、比叡山の北山に登つての静養を余儀無くされていたのである。山崎の病状を心配し、悩んだことが新島自身の病状悪化を加速させたものであろう。

新島邸で夫妻や友人達の愛情と、手厚い看護のもとで療養し、ここで終末を迎えた山崎が、死の教時間前まで自らその病状を記録したものが「山崎君病体録」である。死後、百余年間、秘蔵されていた「絶筆」にも等しい、この資料の行間よりにじみ出るものから、少なからざる感懷を覚えてくる。「病体録」を記述する前に、山崎の病歴をたどってみたい。

山崎が明治四年秋、十四歳で熊本洋学校に入学した直後の写真を見ると、どこかひ弱な印象を受けるのは、早逝した生母・阿美代に似たのだろうか。阿美代は十八歳のとき第一子・長男・爲徳（幼名、周作）を生んだが、三年を経て第二子・長女・ふゆ（冬）を出産した直後に二十一歳で世を去っている。

山崎の実父・戦次郎爲美は仙台伊達藩の臣伊達姓水沢留守家（一万六千石）で大小姓組一番に属し、禄高は五

十石余だが留守家中では上士階級である。江川太郎左衛門の門下として、江戸講義所において蘭学と高島流砲術を修業し、戊辰戦争のときは小銃隊長となり五十余名の部下を率いて勇戦したが、そのとき爲徳は少年鼓手を勤め、隊の先頭にたった。爲美は戦後、司法官に登用された人材であるが、遺されている直筆の「砲術書」を見ると、化学、物理学への教養の高い人であることがわかるし、写真で見る爲美は筋骨質らしい、聡明な風貌の紳士である。五十二歳で病没したが、長寿ではないにしても当時の平均寿命であろう。

山崎は明治十四年の春頃には発病の徴候があったと伝えられているが、勉強や伝道に傾倒して、健康に対する配慮は乏しかったようである。入院直前の六月二十八日に、丹波亀岡での大説教会に出席して「智徳論」と題した演説をしたが、三、四里の山路を人力車に乗らないで、高下駄をはいて踏破帰京。これは病氣への配慮の足りなさよりも、日常的には大した自覚症状がなかったことだろうか。

彼がこの伝道旅行に使用した地図「大日本輿地便覧・丹波国図」に事前の予備知識を丹念に書きこんでいるが、その精勤ぶりと緻密さには驚くばかりである。こうしたことから入院当初はかなりの体力と気力はあったが、そ

の後病勢が急速に進んだものと思われる。

亀岡から帰京後、亀山昇と江州日野に伝道し、七月三日に妹の春野宛「二十日程、有馬温泉に滞在してくる」旨の書信を人に託して、あわただしく出立した。大黒屋で二十日ほど過して帰京し、京都病院で診察を受けたところ、結核との診断であった。七月二十九日（七月三十日ともいわれている）に入院したが、八月二十日頃には下痢、吐食が始まり、恢復を望まれない状態にいたって八月二十二日（二十三日とする資料もある）に同志社英学校生徒、綱島佳吉や同郷の片桐清治等教名に付き添われて新島邸に移った。八月二十四日に主治医で大阪在住の宣教医テイラーの診察の結果「凌方無之趣被申聞候」という病状であった。

新島邸に移ってほぼ一週間を経た九月一日から「山崎君病体録」の記述が始まっている。こよりで綴じた二つ折りの和紙九枚（横十七cm、縦十二cm）に昇天の前日、十一月八日まで脈拍数、呼吸数、体温を毛筆で記載した他に、若干の備忘、体調などを書きこんでいる。

「病体録」を記載した目的は今では知る由もないが、恐らくはテイラーに病状を連絡するための控えとしたものだろうか。「テーラに通信」という書きこみが十三回あるのもその間隔をみると

9月	4日	}	9日
	13日		3日
	16日		4日
	20日		3日
	23日		4日
	27日	}	3日
	30日		3日
10月	3日		6日
	9日		7日
	16日		8日
	24日	}	7日
	31日		6日
11月	6日		

例外が少しはあるが、九月中は大体三〜四日毎であり、十月中が六〜七日おきであることは偶然ではなく、ティラーに報告するために記述したことを示すものであるう。

次に全文を原文のまま挙げるが、原文には誤字は極めて少ないが脱字が若干見受けられる。

山崎君病体録

九月一日 夕方二至り左肺上部二少(シ)痛ヲ覺ユ 其ノ状恰モ針尖ヲ以テ撞クガ如シ 依テ其ノ部ニ適応ノ藥ヲ附スルニ忽チ癒ユ

同二日 朝マタキ丸藥二粒ヲ腹用スト雖モ更ニ大便ノ気色ダモナシ 依テ灌腸器ヲ射用ス 其ノ功顯然トシテ直ニ通ジアリ、シカモ堅尿けんし也キ

同三日 咳嗽至テ少シ故カ涕嘔ノ出ル事モ亦少ナカリシ

右四日 テーラ先生ニ通ズ(この行は朱書している)。

ティラー先生はアメリカンボードの宣教医。同志社英学校の教師を経て大阪で医業と宣教に従事)

同四日 灌腸ヲ為スルヨリ大便ノ通ジアリ シカモ多量ナリ

同五日 本日モ亦灌腸ヲ至ス 何ノ故ニヤ後一時間計リ膚寒ク身震フ (この日は全部朱書している)

同六日 本日モ灌腸シテ大便通ズ

同七日 熱度三十七度七分 脈度九十六 呼吸二十八

本日ハ自ら通事アリ 而シテ咳嗽稍多(シ)

同八日 咳嗽多クシテ胸部痛ム

同九日 昨八日頃ヨリ咳嗽多ク夜間能ク安眠ス 且ツ自然ト大便通ズ 熱度三十八度七分 脈度百十五度 呼吸三十八

同十日 □(読めず) 前異事ナシ シカシ咳嗽多キノミ

同十一日 咳嗽甚(タ)多シ 尤モ涕嘔ハ少シモ出ズ 通事モナシ 東京へ通ズ

十一日 九日及ビ十日分東京へ通信 (東京へ通信は重複して記入している。東京在勤中の実父・爲美に連絡したこと意)

同十二日 大便通ズ 自然ナリ 咳嗽多シトス

同十三日 灌腸シテ大便通ズ テーラ先生ニ通信ス

同十四日 百十七脈 三十九度二分 二十六呼吸
大便通ゼズ 別ニ異変ナシ矣

同十五日 テーラ氏ニ診察ヲ受ク □ (不明) 部ノ
左肺ニ少々悪シキ処ヲ増セリト云フ全体ハ別ニ異
変アルコトナシ 常日汗ノ出ル面部モ本夜ハ其ノ
薬ヲ塗ルヲ以テ発汗セズ

同十六日 大便二度通ズ 夜ニ至テ熱アリ 咳嗽ハ
少ナカリシ テーラ (氏) ニ通ズ

同十七日 大便モ通ゼズ 咳嗽モ少ナシ 此ノ日別
ニ異事ナシ

同十八日 熱三十七度九分

同十九日 咳嗽少シ 其他前日ト異変ナシ

同廿日 前日ト変ナシ 夕方丸薬ニツ服用ス テー
ラ氏ニ通ズ

同廿一日 昨夜大便三度通ズ 寒気セリシニ又熱生
ズ 少々ツカレタリ 熱三十五度 夜汗アリ

同廿二日 熱三十五度 大便二度通ズ 夜汗アリ

同廿三日 熱三十六度半 脈九十二度 大便通ズ甚
(タ)多シ 夜汗ナシ 其ノ他前ニ変ラズ テーラ

氏ニ通信

同廿四日 大便一度通ズ 其他依然タリ
同廿五日 大便通ズ 其他前ト異ナラズ

同廿六日 大便少シツツ幾度モ通ズ

同廿七日 昼夜少シツツ幾度モ通ズ 故ニ少々ツカ

レタリ

同廿八日 大便二度通ズ テーラ氏ニ診察ヲ乞フ

全体ハ前ヨリモフトロイタリ 其他変リタルコト
ナシ

同廿九日 大便四度通ズ 其他前トカワラズ

同三十日 大便二度通ズ 其他前日トカワラズ テ
ーラ氏ニ通信

九月中の記述を通覧すると客観的なこと或いは数値の
記録が多く「少々ツカレタ」「能ク安眠ス」といった主観
的なことの記載は少ない。また、資料によつては「血を
吐いて死んだ」と書くものもあるが「病体録」を見る限
りでは血痰、咯血、吐血等は見られない。或いは「有馬
温泉での風邪がもとで死んだ」と述べる資料もあったが
当たらないようである。病名も「肺病」(肺結核)と言わ
れてきているが「病体録」の記事によつて、より正確な
病名の特定ができないものであろうか。いずれにしても
急速に悪化している模様であるが、薬品としては「塗布
薬」と「丸薬」だけが使用されているにすぎないことに、
当時としてはやむを得ないにしても痛ましいものを感じ

る。

当時、司法省四等属として東京在勤中の父・爲美は爲徳の発病に驚愕し、八月二十六日午後看護婦を同伴して新島邸にかけつけ九月六日まで滞在した。九月十一日に「東京へ通ズ」と記載したのはその後の病状の報告である。明治十二年八月に爲美が弘前区裁判所判事補として在勤時に爲徳が訪れて以来、二年ぶりで病床の子息と再会する父親の「痛み」は察するに余りあるものがある。

十月一日 脈九十二度 熱三十八度二分 呼吸二十

二度 大便一度通ズ

同二日 通常ノ大便一度 昨夜又三度通ズ 水ニシ

テ□□□(三字不明) 少シク黒シ

同三日 脈八十六度 熱三十五度 呼吸二十二度

甚(だ)きぶんよろし 大便五度通ズ 水ニシテ

其色少シ黒シ

同四日 熱三十六度八分 大便四度 ヤハリ水ニシ

テ前ノ如シ

同五日 朝熱三十七度 夕三十七度八分 大便三度

通ズ ヤハリ水ニシテ其色前日ノ如シ

同六日 大便二度通ズ 一度多クシテ一度ハ少ナシ

其他前ノ如シ

山崎君病体録

九月一日 夕方ニ至リ左肺ノ上部ニ
疼痛ヲ覺ス其狀收メ針灸ヲ以テ
撞カセシ後テ其ノ部ニ適宜ノ藥
ヲ貼スルニ思フ瘡ユ
同二日 朝マタチ九葉ニ粒ヲ
腹用スト云々更ニ大便ノ氣色ハモ
ナレ依テ濯腸器ヲ用田ス其ノ切斷
然トシテ血ニ近ジアリシカモ尿尿也
同三日 咳嗽至テサシ故カ涕嗽
出ル事一モ亦ガサカリシ
右側ハニテ一ツモセシト云ズ
同四日 濯腸ヲ爲覺テ大便ノ通ズ
ヤリシカモ五葉ナリ

「山崎君病体録」冒頭部分

同七日 熱三十七度八分 大便三度通ズ 其他変ラズ

同八日 熱三十七度八分 脈九十六度 呼吸二十四度 大便二度通ズ

同九日 脈九十三度 熱三十八度 呼吸二十度 午後熱三十九度四分 脈百度 呼吸廿度 大便二度通ズ テーラ氏ニ通信

同十日 脈八十六度 熱三十六度六分 夕方脈九十七度 熱三十七度四分 大便通ゼズ

同十一日 熱三十二度八分 夜熱三十九度 大便一度通ズ 色ハ前ノ如クナレドモ柔ナリ

同十二日 本日テーラ氏ヨリ診察ヲ受ク 左肺ハ別ニ変リタルコトナシ 通事ナシ 水沢ニ通信(義母・ミヨシは九月十九日に新島邸に來着し看病に當つてゐるから、水沢在住の妹夫婦宛だろうか)

同十三日 大便ナシ 其他変ラズ

同十四日 熱三十七度六分 大便ナシ

同十五日 大便一度通ズ

同十六日 大便アレド甚(ダ)少ナシ テーラ氏ニ通ズ

同十七日 熱三十六度五分 大便通ゼズ

同十八日 脈八十五度 呼吸十八度 熱三十六度八

分五リ(厘)

同十九日 熱三十七度三分五リ(厘) 脈九十度 呼吸廿二度 大便通ゼズ

同廿日 熱三十六度九分 脈八十七度 呼吸十八度 大便通ゼズ

同廿一日 大便一度通ズ

同廿二日 熱三十六度二分 脈八十三度 呼吸十五度 大便通ズ

同廿三日 熱三十七度二分 大便一度通ズ

同廿四日 午前七時熱三十九度二分 十二時熱三十九度八分 脈百二度 呼吸廿二度 午後三十九度二分 呼吸廿度 大便一度通ズ テーラ氏に通信

同廿五日 熱三十五度六分

同廿六日 大便二度通ズ

同廿七日 大便ナシ

同廿八日 大便ナシ

同廿九日 熱三十七度六分 脈九十五度 呼吸十八度 大便ナシ

同卅日 大便ナシ

同卅一日 熱三十九度四分 大便通ゼズ テーラ氏に通信

片桐清治と宮川経輝によると（「新人」大正二・十一・十七所載「水交社の夕」）当初、山崎は恢復の希望をもっていたようである。友人達は山崎にその終末の遠くないことを告知するべきだと協議したが、告知を引き受ける者は一人としていない。結局、宣教医ベリー・ジョン・カッティングに依頼した。

ベリー宣教師から病状の告知をうけた山崎が「これから眠る」と言つてすぐ熟睡したのには、隣室で待機しながら告知の結果を案じていた友人一同感嘆したという。いつベリーが告知したのかは分らないが、テイラーが往診の際に同行したのではないだろうか。

十一月一日 大便一度通ズ

二日 大便一度通ズ

三日 大便通ゼズ

四日 大便一度通ズ

五日 呼吸十八度 脈八十七度 熱三十六度七分

大便二度通ズ

六日 脈八十五度 呼吸十六度 熱三十四度八分

テーラニ通ズ 夕脈九十二度 熱三十七度 呼吸

二十度 大便ナシ

七日 脈九十八度 熱三十八度八分 呼吸廿度 大

便通ゼズ

八日 熱三十四度二分 大便通ゼズ

昼ヨリ十二時頃迄眠り（ここで終る）

最終の記述を「昼ヨリ十二時頃迄眠り」とし「眠る」としていいない。次に続けようとしたことは何であつたらうか。この数時間後に彼の地上の旅は終るのだがその直前に脳裏をよぎったことは何であつたのか。今は解くすべもない。

爲徳危篤の報を受けた爲美は、急いで上洛したが臨終には間に合わなかつた。爲美は後藤家から山崎家に入つたから、爲徳（幼名・周作）は山崎家待望の男子であつた。加えて山崎周作、斎藤富五郎（後の首相・斎藤実）、後藤新平（後の通信大臣・東京市長）は水沢の三秀才と言われ郷土の期待を集め、将来を嘱望されていたから、その死は父・爲美にとってすべてを失なうほどの悲しみであつたに違いない。京都での告別式を終り、水沢に息子の遺髪を携えて帰つた爲美は、菩提寺に爲徳の墓を建立し遺髪を納めた。間もなく官途を辞しているが爲美の才能を惜しむ司法省は、明治十七年春頃、再度東京に招致し大審院書記に登用したが、病を得て明治十八年春に退職して帰郷、同年六月二十日に五十二歳で没した。

文献によつて山崎の死を「十一月八日」とするものを

住々にして散見するが、「病体録」に十一月八日まで記述されている以上、「十一月九日」に昇天したことは間違いない。山崎家墓域所在の爲徳の墓にも「十一月九日」と刻してあるし、第二公会（現同志社教会）での告別式を司式した新島の説教稿も十一月九日であり、これらが日付を誤まることはありえない。

最近刊行の「新島襄全集第八巻」（年譜編）にも「十一月九日山崎爲徳午前六時二十分永眠。大阪にゐる新島に電報を打ち、帰宅を待つて年後四時すぎ納棺を行う」と記述している。

終りに、人それぞれの生と死をさして、別人が「幸」「不幸」と言うことは難かしい上に時には不遜になるし、傲慢にも当たる。しかし「私儀、已ニ耶穌教ヲ真トシ之ニ付テ、天帝敬愛ノ道ヲ学バントス・・・西京ニ学校アリ、耶穌教ヲ学ブニ適シ、故ニ大学ヲ去リ西京ニ行キ、三年間ヲ此教ノ真意ヲ得ント欲ス」と義弟の舞野栄四郎に書簡を送り、明治十年九月に東京大学を退学して、同志社に赴いた山崎にとつて、熊本洋学校以来の知己や新島にみとられながら、旅路を終えることは幸いであつたろう。筆をおくに当たり、山崎の終焉を通してみられる新島襄の「愛」に学ぶこと多きを痛感してやまない。

（岩手史学会員。日本基督教団水沢教会百年史担当）



ホノム聖人―曾我部四郎と新島襄

沖田行司



一

地の塩となり、社会の一隅を輝らす光として、ハワイの辺境の地ホノムにおいて、キリスト教伝道と教育に生涯を送った人物に曾我部四郎がいる。ハワイ伝道に従事した初期の人々の多くは、同志社の別課神学科出身者で、どちらかといえば牧界においては非エリート組に属している。別課神学科を中退した曾我部もまたそうした名もない伝道者の一人であった。曾我部が生涯を送ったホノムは、ハワイの全人口の八割が集中していたオアフ島のホノルルと比較すれば、あらゆる意味で厳しい条件下に

あった。このホノムの地に到着して以来、曾我部は五三年の生涯の間に、その地を離れたのは三回に過ぎなかったといわれている。従って、ハワイ最大の都市であり、日系人社会の中心地でもあったホノルルに出て、華々しい活動をすることもなかったし、所謂、指導者としての役職に就くこともなかった。曾我部の名声は、主として救いを求めなければならなかった貧しい日系移民の人々の間に浸透し始めた。曾我部が主宰したホノム義塾（保能武義塾）は、そうした日系移民社会の底辺に生活する子供の単なる日本語学校ではなく、社会的な弱者の立場に立って、身寄のない子供や、または時には理由ある女性の「駆け込み寺」としての役割をもはたすものであった。

曾我部四郎は一八六五（慶応元）年に福岡の黒田藩士曾我部通故の長子として生まれた。武士の厳しい家庭環境に育った曾我部は十五歳の時、一八八〇（明治一三）年に出身し、三年間の放浪生活を経て、伊予の今治教会に辿り着き、そこで横井時雄と出会うのである。曾我部は横井の家に寄宿し、横井の指導の下に受洗して熱心な信仰生活に入った。曾我部が今治に来てから二年後の一八八五（明治一八）年に徳富蘆花が従兄の横井を尋ねて、曾我部同様に横井家に寄宿するようになった。ここで曾我部

と蘆花は深い親交を結ぶことになる。後に蘆花は曾我部を主人公にした小説『思い出の記』を書き、青年時代の曾我部を描いている。

横井の留守中に、蘆花は曾我部に蘆花の兄である徳富蘇峰が主宰する熊本の大江義塾に入学することを勧め、旅費を工面し、紹介状を持たせて曾我部を熊本に送った。曾我部が熊本に到着したのは一八八五（明治一八）年の一月であったが同年三月の大江義塾創立五周年記念式では、生徒の代表として講演している。大江義塾時代の曾我部は、蘇峰の父一敬からは儒教や国学を学び、蘇峰からは西洋史や哲学など「泰西自由主義」のもとに発展した諸学問を学んだ。しかし、大江義塾は同年の十二月に突然閉鎖され、蘇峰は東京に出て、民友社を設立した。曾我部は、同志社の教授として京都に赴任した横井時雄の勧めもあって、同志社英学校の別課神学科に入学した。一八八八（明治二一）年九月のことである。

曾我部が入学した別課神学科は正規の学校教育の課程を経ずに入学してきた学生を受け入れるために開設したものであった。曾我部と同様にハワイに渡り、ホノルルで日本人小学校を開設するなど、日系人教会のみならず、ハワイ日系移民社会の指導者として、ハワイ当局からも高く評価された奥村多喜衛は曾我部の二年後輩にあた

る。曾我部は同志社で盧花と再会し、旧交を温めた。盧花は同志社時代の曾我部の尊敬すべき誠実な生き方とその人柄について、『黒い目と茶色の目』と題した小説において叙述している。この頃の同志社では、「同志社大学設立の旨意」を全国の主要新聞に発表し、新島も募金運動に東奔西走していた頃である。曾我部が新島から直接教えを受けたかどうかは定かではないが、曾我部が晩年に語ったところによれば、新島の「自責の杖」事件に居合せた堀貞一牧師から教育者としての新島の精神を聞き、大きな影響を受けたということであった。しかし、新島が永眠した年の夏頃に、曾我部は学業を半ばにして退学した。その理由については不明である。

同志社を退学した曾我部は郡山教会で伝道活動に従事した後、一八九二(明治二五)年には群馬県の藤岡教会の伝道師となった。しかし、一八九三(明治二六)年の六月には辞職している。何があつたか定かではない。そうした時に、ハワイから岡部次郎牧師が帰国し、ハワイの日本人移民を対象とした伝道活動に従事する志望者を募集した。曾我部は海老名弾正から岡部次郎を紹介され、ハワイ行きを決意した。曾我部より少し前に、同じく岡部の話を聞いて、奥亀太郎・神田重英・江口一民らがハワイ伝道のために渡布していた。曾我部と同行することに

なっていたのが杉山喜多吉と奥村多喜衛であつた。一八九四(明治二七)年三月に曾我部は杉山とともにホノルルに上陸した。

二

ホノムに到着した曾我部が日本人移民の社会でみたものは南国の別天地とはほど遠い、酒と賭博と売春からなる荒んだ生活と退廃した道徳であつた。そうした環境の中で、貧困や暴力による虐待など、被害を受けるのは社会的弱者である子供と女性であつた。曾我部が最初に着手したのは、親に見棄てられた子供を收容する寄宿舎を有した日本語学校の設立である。ハワイ島の各地を曾我部は募金のために歩き回つた。さらに曾我部は本格的な教育事業を遂行するために、一八九六(明治二九)年に一時帰国し、日本の幼稚園教育の実際や教育にかんする資料を購入した。その時、曾我部は京都看病婦学校を卒業して同志社病院に看護婦長として勤務していた中川シカと出会い、結婚を約束した。曾我部とともにハワイに渡つたシカはホノム義塾の創設から運営及び教育に献身的に従事し、文字どおり曾我部の最良の伴侶となつた。ハワイにもどつた曾我部は一八九七(明治三〇)年にホノム

の精糖会社から提供された土地とハワイ伝道協会及びハワイ島の各地から寄せられた献金によって学校を建設した。この学校をホノム義塾と名づけた。ホノムというのは地名であるが、義塾というのは義校と同様民間人の篤志によって創設された学校という意味で、明治期の自由民権の拡がりとともに一般化した名称である。生徒の増加とともに、ハワイ伝道協会から媒孫民江という女性が赴任し、曾我部のホノム義塾を助けた。曾我部の努力は精糖会社の経営者からも高く評価され、一九〇〇年にはホノムのパブリックスクールに近い一、五エーカーの土地が学校の用地として提供された。ここに新設された学校は教室棟と寄宿棟を有し、その他に食堂や浴場などが附設され、青年寮も増設された。寮生は多い時には一五〇人を超えたといわれている。ホノム義塾では日本語を中心として歴史・地理・修身などが教授されたが、こうした教科教育よりも、むしろ生活を通して、キリスト者としての生き方を身をもって教えるとしたところにホノム教育の特質があった。曾我部四郎に関する唯一の伝記『ホノム義塾―曾我部四郎伝―』の著者である中野次郎氏によれば、子供達には皿洗いから風呂たき、掃除にいたるまで日常生活に関して子供で処理できるあらゆる労働が課せられており、そうした労働を通して、曾我部

は子供の自主性とともに協調性を養い、キリスト教精神にあふれた良き市民の育成を目ざした。

ホノム義塾の日課は起床から朝食までの間に掃除を済ませ、小学生はホノム義塾の隣に位置した公立学校に通った。昼には帰塾し、昼食を終えて再び登校した。公立学校の授業が終ってから二時ほど、日本語教育を受けた。そして、それから夕食までの間、剣道や柔道などの武道の練習に励むものも多くいた。また青年寮ではホノム精糖会社に勤務する労働者も住まいするなどホノム義塾では、曾我部を慕って来た学生から身寄りのない老人や子供などの様々な人間が共同生活をした。こうした中から香川梅子のように、同志社女学校に留学し、卒業後はホノム義塾の教師として曾我部を助ける人材も育った。

曾我部は、同志社時代からの友人で、岡部の勧誘を受けて曾我部より一足早くハワイに渡った江口一民が経営する「布哇殖民新聞」に「保能武義塾教会自給宣言」(一九一二年一月一日)なるものを掲載している。曾我部は新島の葬儀の際に掲げられた「自由教育自治教会両者並行邦家萬歳」という言葉を掲げ「我伝道に対する主張我教育上に於る方針実此の二句に則り来りしなり」というように、ホノム義塾が新島の遺志を継承するものであることを明らかにしている。そして、この自由教育を実践

するため、教会がハワイ伝道会社やアメリカ人の庇護から経済的にも自立する必要があると主張した。さらに、「我有する小学部は必ずしも日本文部省則の直訳にあらず、我は教育上自ら信ずる所あり。例令日本の教科書によりて之を教授するも尚之を折衷取捨補綴を敢えてして憚らざるなり」(同上)というように、日本の文部省からの自立をも宣言している。ハワイの日本語学校がこのように文部省から自立しようとする傾向が一般化してくるのは、一九一五年のハワイ教育会の創立以降である。ハワイ教育会の方針は、アメリカの排日運動と同化政策に対応してだされてきたものであったが、曾我部のそれは、「自由教育自治教会」という新島の遺志を实践するなかで生まれてきたものであった。とりわけ「自由教育」の主張は二世の教育問題と深くかかわっている。曾我部は「布哇出生青年男女観」と題した論説で、ハワイで生まれ育った二世は「布哇生まれ」と軽蔑の言葉で呼ばれるが「一失のみが高調されて一得の方は殆ど忘却され看過」されているとして次のように論じた。曾我部によれば、ハワイ生まれの二世が一世を凌駕しているところとして、第一にアメリカの市民権を獲得していること、第二に「世界語」としての英語を自然に語り得ること、第三には日本の古い「習俗先例の圧迫」より脱した「真正の自由の

子」たりうる存在であること、第四として「人種及び凡ての階級思想を打破」しうるところなどが挙げられている。ホノム義塾の教育はこうした二世の可能性の実現を目指すものに他ならなかった。

三

当時の日系人社会では、仏教系の日本語学校とキリスト教系の日本語学校との間に信徒及び生徒の獲得をめぐり、激しい対立があった。この所謂「学校問題」はやがては外国語学校取締法の制定の要因の一つとなった。このような状況にあつて、曾我部はエキュメニカルの立場を保持しようとした。儒教・仏教・神道などを交えた説教や、ハワイ島に禅宗の寺院を建立しようとするヒロ大正寺建立実行委員会に名を連ねるなど、曾我部は宗派を超えた地平に立つて二世教育と取り組んだ。

曾我部は永年一介の伝道師であったが、ハワイ伝道協会の再三におよぶ勧告により、一九一四年に牧師免許をとり、翌年聖職按手礼式を受けた。何故、曾我部が聖職按手礼式を拒んできたかは定かではない。しかし、移民社会における仏教系とキリスト教系の対立と、曾我部の日本文化に対する深い理解と造詣が大きく影響している

と考えられる。日本人キリスト教会の大部分がアメリカの同化政策の一端を担っていたのに対し、曾我部はホノム義塾において日本の文化的慣習を教育に取り入れたり、仏教寺院との人的な関係も深めていた。本願寺附属の日本語学校の校長が曾我部と親しく交友していたことを理由に解職された時、曾我部はホノム義塾の近くに日本語学校の建設を勧め、ホノム義塾から日本語教師を派遣して、その経営に協力した。曾我部のこうした姿勢は、日米戦争に関する次のような意見に端的に表明されている。

日米若し戦はゞ奈何！余は今日の処、学校を持ってゐるから、余の門下生を例にとつて語りたいと思ふ。余は若し斯る場合があつたなれば、先ず全塾生及び出身者を悉く我がホノム義塾に召集する。然してハワイ生まれを右に、日本生まれの青年を左に座らしめて斯く謂う。「君たちはハワイに生まれ、生まれながらにして米国人である。義、正に米国の為に戦えよ」然して左の方に向つては、「大日本帝国の忠良なる臣民よ一旦緩急あれば義勇公奉じ以て天懷無窮の皇運を扶翼すべしとは正に今の時であるぞ」（中野次郎『ホノム義塾―曾我部四郎伝』）

曾我部のこの発言は一見してご都合主義的にもとれるが、そこには教育を国家や特定の宗教の束縛から解き放とうとする「自由教育」の精神が貫かれているのである。「保能武義塾修繕及改築に就き大方各位の合力を乞うの書」（「布哇殖民新聞」一九一三年七月一七日）で「保能武義塾は此数多き学校の内に自らを煩わし又世の同情者を煩わしてまで存在継続を競ふ程の価値ありとするか」という問いを立て、「大いに然り例令他に幾千百の学校ありと雖も我塾の如き主張と抱負と自任とを有する学校は現代の布哇同胞間に於いては必須の価値を有するものと信ず」と答えている。しかし日米開戦と同時に曾我部はFBIから出頭命令をうけ、やがてハワイ伝道協会からは支援の打ち切りと引退勧告が送られてきた。一九四二年、曾我部の引退とともにホノム義塾の歴史もその幕を閉じるのであった。ホノム聖人曾我部四郎は一九四九年七月三日に八五年の人生を閉じて神に召された。

参考文献

- 曾我部四郎『皇室と基督教』
- 曾我部四郎『もう三千弗』
- 徳富蘆花『思い出の記』
- 徳富蘆花『黒い目と茶色の目』

（大学文学部教授）

中野次郎『ホノム義塾―曾我部四郎伝』

川添監風『移民百年の年輪』

相賀安太郎『五十年間のハワイ回顧』

江口一民『布哇殖民新聞』

付記

曾我部四郎に関する資料のほとんどは遺言により焼却されている。唯一の伝記として中野次郎著『ホノム義塾―曾我部四郎伝』（一九八五年、私家版）がある。（英語版は“SAMURAI MISSIONARY - The Reverend Shiro Sokabe”）本論の執筆にさいしてはこの書物に依拠するところが大きかった。

キャンパスの年輪

―同志社今出川校地―



（増補改訂）

B5判 二一三頁

頒価一、五〇〇円

社史資料室長

河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物あるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのぶ格好の書としてご購入ください。

●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話（〇七五）―二五一―三〇三七・八